

【タイトル】

月下ニ桜乱レテ

〱ソノ樂園ハ彼ニ受難ヲ与ヘル〱

【あらすじ】

高校二年生のマモルは、早くに母親を亡くして父親と二人暮らし。母の命日にあたる週末、父は息子を庇うため交通事故にあい、死んでしまう。母の実家「桜川家」は千年の歴史を誇り、一子相伝で歴代が女性当主。補佐役の「お屋敷様」や家臣全員が女性という特異な体制をしいている。霊山の神を封印するために存在していたが、マモルの母、桜川ゆいが当主継承の儀を目前に家を離れて真條孝太郎と駆け落ちをしてしまう。絶大な霊力を誇っていた同家も当主不在の時間がつづき、その力が失われつつあった。

両親を失い孤児となってしまったマモルは母を苦しい立場に追いやり、家を出なければならぬ元凶にしか見なしにいなかった桜川家に嫌悪感を抱いていたが、父の弔問に来た同家家臣筆頭ほのかからの「新しい家族になりたい」という言葉を受けて次第に心を許していく。その後、彼は当主にはならないという条件のもと、桜川家に身を寄せることを決める。

あたらしい生活が始まった直後からマモルは家臣たちの心を鷲掴みにしていく。それは武芸一筋に生きてきたちあき・ファザコンのかえで・感情の起伏が乏しいちはやなど、異性に関心がなかったり拒絶反応を示す者たちも例外ではなく、かえってそうした者たちの方が敏感に感応していた。

白壁学院高校登校初日、マモルは同級の藤代真穂子の襲撃にあい、今すぐあの家を立ち去らなければ命の保証はないと脅される。学校警護役のちはやがいたにも関わらず二日連続で襲われた事態を重くみたほのかたちは、授業参観の機会を利用して襲撃現場を視察、そこで謎の女、闇千代にほのかは出会う。自分とうりふたつの容姿をもっていた闇千代は、精神攻撃をしかけて欲望を暴き出す。このことは、愛するマモルと二人だけの幸せな家庭を築くという無意識下の願望をほのか自身に意識させる契機にもなった。

一方で真穂子は敵性対象であるはずのマモルに別の感情をいだくようになる。新たな気持ちを払拭させ、桜川家当主になるという目的を完遂させるため、彼女は桜川家に乗り込み我こそが正統後継者であることを宣言する。当主不在時の最終意思を決定できるお屋敷様はそれを公認したが、それでも次期当主はマモルであるとの裁定を下す。ただし、マモルに継承できない状況が発生した場合を除くとの付帯宣言もあった。これを真穂子は当主の座は実力で奪ってみせよというお屋敷様からの意と解釈し、屋敷をあとにする。

このあとマモルは、当主継承の儀と同義の神との結合の意味を改めて知る。家臣たちは結合が確実に完了するための性的訓練対象であることに驚愕するとともに、「新しい家族」を謳ったほのかに裏切られたとの思いを募らせ、屋敷を飛び出してしまう。桜川家での生活にも少しずつ慣れ、家臣たちとも打ち解けてきた矢先のことだった。

行くあてのないマモルはすべての源である霊山を目指していたが、バス車内にいた彼を真穂子は学校に拉致する。そして芽生えつつあった思慕の念を封じ、桜川家当主になるという藤代家五百年の宿願を果たすため、抹殺を試みる。だが逆に自分が深手を負ってしまう。闇千代はこの時、真穂子の計画を阻止するため動き出す桜川家屋敷に攻勢に出ようとしていたが、主人の危機を察知し現場に急行、治療を行う。ところが、体力的な回復は見込めても気持ちは落ち込んだままで、神がマモルを庇った。わたしはもう当主にはなれないと発言する事態に困惑を覚える。マモルと合流したほのかに決戦を挑もうとするも、真穂子からの命令により矛を収めざるを得なかった。一方でほのかは闇千代からの挑戦を受けた際、危地から主人を離脱させるため、霊山に瞬間移動させる。

次期当主の窮地を知った桜川家では救出班が霊山に向く。しかし、現場の指揮を執らねばならない修衛班長ちあきは、そこまでを見届けると家令部長ほのかに指揮官の辞退と暇乞いを願い出る。私情を制御できない今の

自分に指揮は務まらない。これからは個人としてマモルを助けにいくという。上司の制止にも一切耳を貸そうとしないちあきは修衛班長制服を脱ぎ、下着姿になり立ち去ろうとする。ほのかは自分の前に折りたたんで置かれた制服を着ていた者の背中に投げつけ、不屈き者が着ていた服をわたしの部屋に置いていくなど厳しい口調で言い放つ。抗命罪で拘束されても不思議ではない状況にあつて、救助に行く自分に厚意を示してくれたほのかに感謝の気持ちをもつ元修衛班長。だが顔だけを元上司に向けて軽く一札するにとどめ、部屋を出る。

ちあきの退出を受け、ほのかもまた霊山の麓にある旅館を貸し切つて設置された救出本部を出て隣にある森の中へと入っていく。そこで身の丈以上に大きな岩を見つけるや、それを正拳突きの一撃で粉碎すると欠片に変化した石を拾いあげ、粉々になるまで握り締める。

（あなたがマモルの何を知っているというの。わたしはこの七年間ずっと彼を見てきた。そして愛してきた。なのに、ただか数日前に知ったあなたのこんな我がまが通るなんて、おかしいじゃない！）

雑木林の隙間から澄み渡る空に輝く満月が浮んでいる。だが、彼女にはおぼろ月にしか見えなかった。溢れ出ようとする涙を脱ぎ払い、桜川家最高指揮官は公務へと戻っていく。

突然霊山に飛ばされたマモルはそこで数々の命にかかわる受難に遭遇するも、ちはや・ちあきの援護によりどうにか危機を乗り越えていく。同時に二人と行動を共にする時間はマモルに彼らの想いを知るきっかけを与えた。

闇千代からの指南を受けて幼いころより育んできた野望と女として芽生えた情愛。このふたつの思いは真穂子の心に深い葛藤をいだかせることになった。身を削るような高熱にうなされながら自問自答した末、望んでいるのは当主の座ではなくマモルとの愛を深めていくことだと気づく。

数度にわたり繰り広げられたちはや・ちあきVS闇千代・八雲との戦いだったが、決戦にあつてちあきたちは絶対的不利に陥ってしまう。それを救ったのがほのかだった。彼女は闇千代たちに一時的に勝利したものの、一体化した闇千代・八雲に氷漬けにされる。また、戦場から離脱したちあきもマモルの身代わりとなって死んでしまう。

これに激怒したマモルは、封印を解いて神を召喚。闇千代・八雲を抹殺する願いを聞き入れた神は二人に激しい痛みを与えながら命を縮めていく。願主はこの時、神を動かす優越感と愛する者を殺した者への憎悪に囚われはじめていた。そこに現れたのが真穂子だった。彼女は言う。この願いが聞き届けられた暁にはマモルは神を動かす力に引き込まれたまま、当主継承の儀をこの場で行わなくてはならなくなる。結合は神がいざなう最大の誘惑。それを拒むことなどできはしない。男であるマモルはなおさらだ。そしてそれは霊的修練を積んでいないマモルの命が失われていくときでもあると説いた。自分の野望のために傷ついた二人の命を救うため、なによりマモルの命を救うため、願いを取り下げるように頼む。

それはならぬ、と突如現れたお屋敷様がいう。マモルには神と結合を果たして桜川家のために死んでもらわねばとも。真穂子が答える。当主にはわたしになる。あなたにとつて理想の当主、神の子を生み、消滅する存在になる。だからマモルの命は助けてほしいと懇願するもお屋敷様はにべもなく拒否する。お前とマモルとは発現する靈力に雲泥の差がある。お前は桜川の女としては上出来だが、開祖以来の潜在的靈力を保持するマモルには到底かなわない。彼奴には母の罪を償うため桜川の人柱になる義務がある。それにお前が当主になるのなら、交通事故に見せかけて殺した真條孝太郎の命も無駄になつてしまふと静かに語った。

事情を察したほのか、そして彼女と分かりあえた妹の闇千代は、わが身と引き換えに桜川まいの魂を複製して自分たちを創造したお屋敷様の消滅をはかる。息絶えようとする彼女の前に姿を見せたのは開祖、紀貫之だった。彼はそこにいたすべての者に謝罪するとともに、鶴（お屋敷様の本名）を恨まないでやってほしい。かの者に生を与え、桜川の存続のみを使命とし、愛を知るすべを与えなかった罪はひとえに自分にあると言う。木でできた傀儡（くぐつ）の肌が露出した鶴の手を握り、彼はその場から消えていく。これを見届けた神はマモルに向き合い抱擁する。「悲しみを乗り越えて己を鍛えよ。その時がくれば我は誓約を果たすだろう」と言い終えるや、身体が光の粒の集合体に変化し、昇天していった。

お屋敷様・ほか・闇千代が亡くなり、屋敷は大炎上の末に消滅した桜川家。霊力もかつてほどの力は保持していなかった。だが、新しい命を迎え入れ、新生桜川家は新たな営みを始めていく。それは、まいやほかの願っていた新たな桜川家、新しい家族を表していた。